

岸 圭介 (2024) 学力は「ごめんなさい」にあらわれる. ちくまプリマー新書.

はじめに

何回言えればわかるのと、親が子どもに伝える様子は珍しくない。一方的にしかりつけうんざりした顔をした親。納得のいかない表情で「ごめんさい」と小さくつぶやく子。コミュニケーションがかみ合っていない。

子どもの行動が変わらないのは、子どもに原因があるからというのが前提。しかし、子どもの行動を決定している要因は、親のことばの教え方にもある。「子どもにことばが正しく伝わる」ということについて真剣に考えてみる必要がある。

本書では、大人が子どもに対して、特定の言葉の意味や価値を教えることを「ことばの教育」と呼ぶ。先ほどの例で子どもが親の言うことを聞かないのは「ことばの教育」の結果と考えられる。子どもをよりよい方向に変化させたいのであれば、考えなければいけないのは「ことばの『意味』と『価値』をどう伝えるか」なのだ。

## 第1章 ことばの意味と価値

子どもの成長を正しく捉えるには、使っている言葉に注目する。ことばの裏側にある価値を読み取る必要がある。

### (1) ごめんなさいには違いがある

ごめんなさいは相手の許しを求める意味。謝らなければいけない場面で使う言葉である。新明解第7版によると、「謝罪の気持ちを表すときの挨拶の言葉（親しい間柄では「ごめん」とも言う）」と書かれている。

しかし、実際には「ごめんなさい」の意味は使う人によって違うものになる。待ち合わせに遅れた人の「ごめんなさい」と待たされた人の持つ「ごめんなさい」の感覚は違う。この感覚のずれ、違和感が「ごめんなさい」の意味のずれであり、ことばをどう受け止め、どう使うかという感性の問題でもある。言葉の意味や価値を身に着ける土台は、幼少期から気づかされてきている。

ごめんなさいの「質」・・・危険な行為に対して、確実にやってはいけないことをわからせなければならぬので、わかっている「ごめんなさい」と、もう一度繰り返したときの「ごめんなさい」は、違う。何度も廊下を走ってしまう子どもには、必要に応じて厳しくしたりすることで「ごめんなさい」という意味を体感的に理解させ、「ごめんなさい」という言葉は、同じ状況では二度と使わない言葉であると学習させる必要がある。

ごめんなさいの「量」・・・何かあれば、ごめんなさいといえればいいと思っている人がいる。一方で、人との信頼に直結するから気を付けて使おうと心がける人もいる。

### (2) ことばが届く人と届かない人

納得せずにつぶやく「ごめんなさい」は形式的な言葉である。子どもにとっての意味や価値を修正していく必要がある。もしあなたが親だったら、方法は一つ。自分や子供の言

葉の使い方を修正して、子どもに新たな価値観を作るしかない。大人も言葉をどのように使っているかを振り返る必要がある。

また同じ言葉をかけられても、抱いた気持ちが真逆になることがある。言葉は決して内容だけの問題ではない。「言葉の教育」では、子どもにとって大人がどちら側にいるかが重要だ。

### (3) 言葉の価値は聞き手が決める

教室の雰囲気は、どの先生が来たかによって違ったはず。その雰囲気（空気）も教師の言葉が作っている。子どもと正しくコミュニケーションをとりたいのであれば、まず言葉が届く人になることをめざすべきである。決して暴力的に子供を支配したり、強制的に物事を進めたりした方がいいという意味ではない。大事なのは、一回の言葉を真剣に届けようとする姿勢そのものにある。

子供は教師が同ふるまうかによって本気度を測っている。ことばの価値は、話し手の行動とセットになる（これが鉄則だ）。「ことばの教育」を考えると、教育する側にいる立場の人がどのように言葉を使っているかは、大きな問題だ。口にすることは必ず守る、守らせるということがことばの価値を高める一番の方法だ。

人は経験を通して、ことばの意味と価値を体感的に学んでいく。そのため「ごめんなさい」という感覚は、人それぞれ異なる。ことばへの感覚が子どもの品格や行動特性に影響を与える。

状況や程度を考慮せずに一律に叱ってしまうと、子どもは物事に対して軽重の判断がつかなくなる。安全にかかわる場合は厳しく対応するなど、叱る程度や内容を変えることが大切である。

同じ情報でも誰が話すかによって聞き手の意識や理解度は変わる。言葉に責任を持つ人の話は、緊張感をもってきくようになる。

## 第2章 聞くこと一静かにしなさいが奪うもの

「しずかにしなさい」はつい大人が使いがちなことばだからこそ、その影響力を理解しておくことは大切である。この言葉を子供が素直に受け入れるようになると、かえって聞く力が伸びなくなることがある。「しずかにしなさい」万能ではない。

「話す」は目には見えないが、音声として確実に残る。でも「聞く」という行為は、実態が見えづらい。話し手にとって価値があると認めている「聞く」は、果たしてすべて同じ意味なのか。

いつまでもわがままを言い続ける子どもに対して、「しずかにしなさい」は、しつけの一環から発する言葉である。しかし、一律に使っていい言葉ではない。大人が使い方を誤ってしまうと、かえって子供の聞く力の発達を妨げることがある。

### (1) 「話を聞く」≠静かにする

わたしたちは、「聞く」という行為を「しずかにする」という意味でつかうことがある。そのようにとらえている人にとって「話を聞かない子」「静かにしていない子」と同義である。

しかし、「聞く」とは「しずかにする」つまり「常にだまっている状態」とは限らない。例えば、会社の会議中、担当者がプロジェクトの進捗状況を報告している際、他の社員は静かにしているが、手帳のスケジュール管理に夢中な人、子どものお迎えと夕食の準備でいっぱいの人、もはや疲れすぎていて上の空の人など、しっかりと口を閉じて座っているが、実際には聞いていない。

このように、「聞くこと」と「しずかにする」ことは別問題。

本来、理想的な「聞くこと」は、聞き手が話し手の意図をくみ取ったり、大事な要点は何かを想像したり、自分だったらどう伝えるかを考えたりといった内容になる。だから「聞く」は、聞き手の話から「感じ取り、考えなさい」という意味が強い。聞き上手は、相手が気持ちよく話せる雰囲気を作る人、決して受け身な態度ではない。「しずかにしなさい（聞きなさい）」は、「静」ではなく「動」である。

## （２）話を聞かない子への誤解

しずかにしない子の発言をよく吟味し、教師はつぶやきはや反応の名詞をよく吟味して、児童の聞き方が変化する声かけをすることが求められる。「よく聞いていたね、最後までじっくり聞いてみよう、次は手を挙げて意見を伝えてくれる？」というように。児童の姿勢に変化が見られたら、意欲と態度を価値つけてあげる。言葉が届くようになっていくという。一方で、教師が叱って静かになった場合、「好ましい成長」として教師が受け取る場合があるが、発言をしなくなったという変化なのかもしれない。これもコミュニケーションのずれの例である。

## （３）listen のすすめ

しずかにしなさいは、考えない子どもを育ててしまうこともある。落ち着きがない子ども実は聞いていたりする。大人が子供の様子から気にかけてあげなければいけないのは、子どもが聞くことをどう学習しているかである。

聞くという行為の意味と価値は、常に他社とのかかわりの中で生まれていく。家庭でのやり取りで築かれる価値観が、その土台となる。

スマホの誕生で、画面を見ながらの会話の機会も増えた。Listenではなくhearの状態となっている。聞き流してもいい、聞き逃したらまた聞けばいい、そういう緊張感のない会話が日常となっている。好ましいコミュニケーションは、聞き手と話しての呼応が求められる。表情を変えたりうなづいたりすることが望ましい聞き手である。適切な聞き手の反応によって話し手は表現を変える。お互いの応答によって、理解は深まっていく。聞き上手は反応上手であり、好感度も高い。

一方、習い事で疲れているからと、子どもの怠惰な姿勢を親が簡単に受け入れてしまうこともある。聞くという行為は、言葉を理解する土台となるものだ。土台が安定しないと言葉を学習できない子になってしまう。スマートホンの画面をいながらのやりとりに違和感を覚えるかどうかは、親がどのように対応するかにかかっている。

## （４）子どもが話を聞く理由と「相手意識」

子どもたちが考える話を聞かなければいけない理由は、

- ・話をちゃんと聞かないと、わからないが増えて、自分が困る
- ・叱られるのがいやだから
- ・大事なことを聞き逃したら、すごい損しちゃう
- ・せっかく目の前で話をしてくれているのに、聞かなかつたらかわいそう

はじめの3つは、基準が自分、最後の発言は、基準が相手。相手の存在そのものが聞くことの理由となっている。内在する相手意識がその子の聞く行為を促している。成長伸びが顕著にみられるのは、最後の発言の児童である。

・「聞くこと」と「静かにすること」と同義ではない。理想的な聞くことには、考えることが含まれる。そのため、大人が頻繁にしずかにしなさいと口にするだけで、考えない子どもを育てる危険性がある。

・子どもには話の理解度によってうなずいたり、表情を変えたりすることを習慣づけたい。こうした反応が知識や技術、価値観を学んでいる一つのサインといえる。反応の仕方が上手だと相手の印象に残り、人生のチャンスが増えていく。

・聞くことの土台は相手意識にある。話し手を思いやる気持ちが育っている子は、興味や関心に関係なく、多くの情報を得ることができる。適当な姿勢で聞くこと認めてしまうと、それが子どもにとっての聞く基準となってしまう。

### 第3章 話すこと——「おはようございます」は必要ないか

あいさつに価値を見出すかどうかは、あいさつを学ぶ過程にかかっている。

#### (1) 挨拶不要論

・なんでわざわざ知らない人に挨拶をしなければならないのか。昨今では新入社員から真顔でこんな質問されると耳にする。若い世代を中心に広まっているとされる、いわゆるあいさつ不要論だ。

・親しい間柄でもないのになぜ頭を下げたり、わざわざ自分からコミュニケーションを図ったりしなければいけないのか。納得がいかないのだろう。上司や先輩から挨拶を強要されるのに反発する向きもあるようだ。一方、幼少期から積み上げてきた話す事に対する学びの成果だと思う。幼少期におはようございますと自分から話しかける習慣を築いている人もいる。その人にとっては挨拶するのはもはや疑う余地のないことなのかもしれない。挨拶なんて無駄と主張する新入社員と上司や先輩とかギクシャクする構図その根本にあるのは、お互いが感じている挨拶という言葉の意味と価値のずれだ

#### (2) ことばの意味や価値を増やす視点

・挨拶の意味や価値を親から教えられていなくても方として習慣が築かれている子はおそらく大人から多くの肯定的な声掛けをされてきているだろう。「えらいわね」「しっかりしているね」「素敵なお子さんね」こんな声かけをされながら相手の反応を見て挨拶の意味を学習する。

・特定の大人に好印象を与えるための所作という意味づけを自然とする子どももいる。この感覚が土台となった場合、同世代の人に対する挨拶の意識は希薄になる。なぜならそこに対する意味があまり無いから。なので子供同士で挨拶をする習慣がない子もいる

・一つは礼節としての意味合いだけでなく他者との関係作りにも影響する。子供にとってみれば友達作りのきっかけにもなる。

・親は子どもから親友という言葉が出てくることに安心する。しかし子どもの話す力を伸ばす上で危うい点がある。それは子どもに対する親友という言葉の価値づけである

・警笛を鳴らしているのは簡単に「親友」という言葉を使いすぎることである。仮に親友と喧嘩をした場合、親友なんてまたすぐにできるからいいや、なんて考えたとしたら、親友は軽い言葉になってしまう。反対に、親友とずっと一緒にいた方がいいと強く言い過ぎると、それ以外に居場所がないということを学習をさせることで、子どもの交友関係の可能性を閉じてしまうことになる。親友は生涯にわたっての付き合いになることもあるので、親友という言葉の本当の意味と価値を知るのはもう少し先でも充分だと思う。子どもの成長に関わることだからこそ大人が言葉の重みを正しく捉えさせることが必要なのだ。

・子どもの交友関係が安定するのは心地いいものだ。心が穏やかになり波風が立たない状態なので、親が子どもに親友ができることを望みがちなのも安定を求める気持ちの現れなのだ。しかし、穏やかで波風が立たない環境というのは。子どもの精神的な成長にとって決して望ましいことだけではない。子どもの発達には変化も必要だ。安定とは真逆の環境が求められたりする。安定はそれ以上の大きな進展をのぞめないということなのだからやっぱり固定化された親友の存在だけは、価値観は決して広がらない

### (3) 恥ずかしがり屋はチャンスを逃す

・子どもは多様な関係の中で学んでいく。だから挨拶は特定の誰かだけでなく、むしろまだ知らない誰かにしてこそ可能性が広がる。誰とでもやり取りができる子は、人から学ぶことの価値を、知らず知らずのうちに学んでいる。こういう子は顔を突き合わせて頷いたり嬉しそうに相槌を打ったりと共感的に相手に近寄ろうとする姿勢が感じられる。相手が薦めてきたことに面白がって挑戦してみることで世界を広げていく

・まだ見ぬ一人一人が自分の将来に関わっているかもしれないと思うと人と関わらないことは損失にも思えてくるはずだ。上手に挨拶できる子はチャンスをつかめる子でもあるということを忘れてはいけない。出会いという観点から見るとあいさつにはまだ可能性がある。

・あいさつには成長へのきっかけや運命を変えるかけがえのないものという意味と価値がある。あいさつを通じて子供は人と話をする喜びを学ぶ。多くの人におはようございますと言った数だけ子どもの可能性は広がっていく。

・成長には異なる人の考えや価値観を受け入れるという視点が欠かせない。親友はかけがえのない存在ではあるが、人とのつながりを狭める危険性もある

・言葉遣いを正す意図は品位の問題だけではない。一律に同じ言葉を使わせないことで、考える習慣を築く意味もある